民俗学

８．まつる－年中行事－

菊地暁（folklore.lecture@gamail.com）

①年中行事 annual ritual 原論

・儀礼 ritual：「形式性」をともない「非功利的」な目的をもつ行為

・いわゆる「年中行事」と民俗学好みの「年中行事」

・「切迫した生存感覚に立脚する慣習的行為の体系」（≒「呪術」の定式化、集団化、周期化）

②柳田国男の「固有信仰論」

・『日本の祭』（1942）：「祭から祭礼へ」（＝「都市」の成立）

①「見物＝観客」の発生、②「風流（ふりゅう）」の展開、③「職業神主」の出現

・マツリの原型

①物忌・精進、②祭場の標示、③神供（火、食物、芸能）、④直会：神人共食

・『祭日考』（1946）　時期：定期的（2 月と 11 月または 4 月と 11 月→春と秋）

・『山宮考』（1947）　場所：臨時（山と里の往還）

・『氏神と氏子』（1947）　祭祀対象＝祖霊／祭祀者＝同族集団（イエ）

→「柳田祖霊神学」祖霊一元論：田の神＝山の神＝家の神（祖霊）

③伝統的な年中行事

・春祭り秋祭り：予祝と収穫感謝

・盆と正月：祖先祭祀？

・夏祭り：疫病除け

・神事／神賑行事／イベント

④年中行事の近代／現在

・ハレ／ケ（非日常／日常、聖／俗）区分の曖昧化

・客体化（objectified）される年中行事（観光化、まちおこし、文化財保護…）

・遍在する呪術的思考⇔定式化・周期化へのハードル、「祭りがあるということ」の意味

＊文献

柳田国男 1939『歳時習俗語彙』民間伝承の会

米山俊直 1974『祇園祭』、1979『天神祭』中公新書

菊地暁 2025（2001）『柳田国男と民俗学の近代- 奥能登のアエノコトの二〇世紀』岩波現代文庫（吉川弘文館）

南里空海 2011『神饌 神様の食事から“食の原点”を見つめる』世界文化社

釈徹宗・高島幸次 2012『大阪の神さん仏さん』140B

芳賀日出男 2014『日本の民俗：祭りと芸能』角川ソフィア文庫

本多健一 2015『京都の神社と祭り 千年都市における歴史と空間』中公新書

森田玲 2021『日本だんじり文化論：摂河泉・瀬戸内の祭で育まれた神賑の民俗誌』創元社

中西仁 2024『神輿舁きはどこからやってくるのか：京都にみる祭礼の歴史民俗学』昭和堂

村上紀夫 2025『増補 京都地蔵盆の歴史』法蔵館文庫

柳田国男 1941『日本の祭』弘文堂（ちくま文庫全集13巻）

したのではないかと思っている。すなわち少なくとも諸国の多くの御社の神の御渡りにも、この綺麗な御輿を用い始めたのは流行であり改造であり、近世の平和期以後の文化であり、従ってまた主として都会地にまず入ったもののようである。工芸史の方面から見ても、この事はかなりはっきりと説明し得られる。つまり日本の新たなる文化は、第一次にまた広範囲に、この方面に適用せられたのである。これにはすこぶる複雑な社会心理が働いていることと思うが、とにかくにこれによって、多くの城下町や湊町に、一つの立脚地または一つの力と頼むものができたのだが、その代りには「日本の祭」は、よほど昔の世とは変ったものになった。これがまたいわゆる祭礼を、他の種類のさまざまの祭と対立させて、考えてみなければならぬ理由でもある。

五

日本の祭の最も重要な一つの変り目は何だったか。一言でいうと見物と称する群の発生、すなわち祭の参加者の中に、信仰を共にせざる人々、言わばただ審美的の立場から、この行事を観望する者の現われたことであろう。それが都会の生活を花やかにもすれば、我々の幼い日の記念を楽しくもしたとともに、神社を中核とした信仰の統一はやや毀れ、しまいには村に住みながらも祭はただ眺めるものと、考えるような気風をも養ったのである。この気風はむろん近世に始まったものでない。従ってすでに明治以前からも、村里の生活にも浸潤し

ていた。村の経済の豊かな年には、農民はいつもこの「見られる祭」を美しくしようと心掛けつつ、しかも一方には彼等伝来の感覚、神様と祖先以来の御約束を、新たにしたいという願いを棄てなかったゆえに、勢い新旧の儀式のいろいろの組合せが起り、マツリには最も大規模なる祭礼を始めとして、大小幾つとなき階段を生ずることになり、一つの名をもって総括するのも無理なほど、さまざまの行事が含まれることになったのである。そういう中でもことに複雑で、ただ見ていただけではちょっと沿革のわかりにくいのは、神さまを祭場へ御迎え申す手続きであった。前年私は甲州の御岳に参ったとき、ちょうどその日が夏の祭礼の日だったので、旅人として詳しく拝観することができた。この祭にはまず金色の神輿が出て、それには神殿の御鏡を神官が袖に奉じて、輿の中へ御移し申す式もあるのだが、他の一方には神馬がその行列の中に加わっている。この馬は今は村の有志家から借り上げるらしいが、これには神官が乗るのでもなく、またただ飾りとして後から曳くのでもなくて、特別の鞍があってその中央に御幣を立てるようになっている。そのまた御幣というのが毎年の祭ごとに、後から後からと白紙で剪ったしでを、幣串のまわりに巻き立てたもので、御幣とはいってもまん丸な独楽のような、珍しい形のものになっている。本来はこれが神霊の依坐であったことは疑われない。すなわち新式の飾り御輿を、ここでもいつの頃からか担ぐことにはなっているのだが、そのために前々からある神馬で御迎え申す方式は中止しなかったので、二通りの乗物が連なることになっているのである。

この御社の古い方の神の依坐は、御幣すなわちミテグラになっているのであったが、これ

いつから言い出したとも知れぬ言い伝えをもち、住民もまたそれを誇りにしているものがある。いずれも大昔からこの通りのようにいうが、実は近年おいおいにそうなったようである。こういう空気の中に大きくなった人々は、知らぬ間に祭の概念を変えられている。そうしてこれという見どころのない村々の小さな祭を、何だか気の毒なもののように考え始めたのである。

九

祭と都市文化との交渉はかなり深いが、その中でも祭の季節というもののちがいは、誰の目にもはっきりとしている。町の祭の思い出は夏のものに多く、夏の祭というものは上代に少なかった。もちろん四時の境目ごとに、祭を営むべき機会はあったろうが、一年を通じていちばん大きな祭は、何としても秋の収穫後の、物の豊かな時に行われるもので、その次には春の末または夏のかかり、農村では苗代ごしらえにかかる前のものがあった。旧暦四月八日という日が、特に山の祭と関係があったようである。人のよく言うのは春秋両度の祭、これは農業ことに稲作の始めと終りとを、表示したことはほぼ確かで、その前と後と定まった日を、山の神が田に下りまた田の神が山に入る日として、祭るという風も農村には多い。あるいはこれをえびす様が稼ぎに出る日、または大黒様が稼ぎから戻って来られる日などともいって、少しずつ言い伝えは変っているが、国の公けの祭の新嘗祭に対して、二月に祈年

祭があるのと本の趣旨は一つのものだと思う。

暦はわが邦では農作のため、同時にまた神祭のために備えられたもののように思われる。少なくとも祭に関係のない節日というものは元はなかった。五節供という名称は武家では重んじていたようだが、農民の間では節供といえば三月三日と五月五日が主で、正月と七月の七日もただの日ではなかったが、これを節供の一つとまでは思っていない者が多かった。九月九日も節供と呼んでいる土地はあるが、これだけはやや別の心持をもって迎えられていた。すなわちこの日をもって大祭の日、また祭礼の日とする地方が多かったのである。九州の北半分では、クンチというのが村の御社の例祭の日を意味している。文字では供日とも宮日とも書いているが、なおその名の起りは九日であって、たまたまその日に祭をせぬ土地があったために、これを別の語かと思うようになったのである。隣近所互いに往来して、長く秋祭の喜びを続けるように、わざと八日にも十日十一日にも、日をちがえている村が私の郷里などにも多く、たしか明治の終り頃に、その弊害を認めてこれを九日に統制したことがあった。関東の各地にも、またクニチという名がある。これははっきりと九月九日のことと認め、ただ作物成熟の遅速に応じて、三九日と称して中の十九日でも、末の二十九日でもよいことにしている。そうして例外もあるか知らぬがこの方面では、祭礼とも名づくべき大祭は春季に挙行し、九日はただ物静かな家々の食い祭、すなわち親類が互いに訪問して、酒を飲んで楽しむ日としていたものが多いようである。それでもこの日は馬場に幟を立て、御宮では太鼓を叩き、また西日本でいうところの頭屋祭がある。ただ祭礼といってよいような行列や催し